

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	意志その他に就ての斷片 : 隨筆
Author(s)	北森, 嘉藏
Citation	龍南, 226 : 1 - 5
Issue date	1933-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7142">http://hdl.handle.net/2298/7142</a>
Right	

## 意志その他に就ての斷片

北 森 嘉 藏

人間に與へられた神の恩寵は、その爲に彼の中に必然的に生ずる内面的歡喜の生活が、善意志への轉向となつて發現しない限り、彼に於て眞に顯れたとは云へない。そして善意志への轉向は、丁度神の攝理から離脱する可能性が人間の自由意志に與へられてゐると同様に、これも亦人間の自由意志に與へられた可能性である。

而も規範に向ふ善意志を獲得すること、即ち新しき個人としての道德生活は、前述の神祕的領域に於ける變革以外からは、到底出發し得ないのである。

○

我々が與へられた倫理的要求に應じようと努力することは、それが最高善自身の意志と我々自身の人間的意志との一致に對する努力として認識される範圍内に於てのみ、宗教的に解釋される。そしてその要求との不一致に對する我々の恐怖は、その不一致が我々の内的平安の状態を攪亂すると云ふ理由の下に於てのみ成立する。(何となれば絶對的な平安は攝

理の中に於てのみ維持され得るから。）従て平安の攪亂に對しては、この内的原因以外のあらゆる外的原因は、我々の周圍から影を潜める。

人間がその自由意志の恣なる行使によつて、（それは究極に於て倨傲となつて顯れるだらう）攝理から背逆離脱するとしても、それは單にその攝理完成の爲の一手段として利用されてゐるに過ぎないと云ふ目的論的世界觀が、若し成立するならば、意志の自由や個性の價値は（例へそれが如何に嫌惡すべきものであらうとも）全く存在しないことになるだらう。上の命題を否定することが如何に恐怖すべきことであらうとも、我々は之を全量的には肯定し得ないといふことは事實である。従て未來の或る時に於て、「暗黒に扱げ出」されて「哀哭・切齒する」者のあることは、形而上的範圍に於てもよく解釋され得るのである。

攝理の中には「惡なるもの」は一切含まれてゐないと云ふ事は、我々の理性を以ても了解し得る。この事を否定すれば神の屬性と全く矛盾することになるからである。

従てそれは苦難或ひは死に導くことはあり得るとしても、（これに就ては完全なる實例を我々は有する）それは決して「惡なるもの」へは導かない。故に人間が惡に陷るのは、全てそれから離脱したことのみを示すことになる。従て完全なる攝理の示顯は、基督に於てのみ可能であり得たのであるから、我々に適用された場合の意味が絶對的であり得ないのは勿論である。

○  
「支肢をして幸福ならしめんが爲には、それに一の意志を持たしめ、それを全体に合一せしめなければならぬ。」

(パスカル)

然るに支肢達は汲々として幸福を求めながら少しもこの事に氣付かない。中には紙細工の城廓に籠つて晏如たる者もある。

○  
支肢が採用する惡意志は、その支肢をして自己を嫌惡せしむるに止らずして、その支肢が屬する全体の意志即ち善原理そのものゝ存在をさへ嫌惡せしめ疑惑せしむるに到る。

○  
不幸が不幸以外に意義を有するのは、唯神の攝理に對して搖ぎなき信賴を持してゐる人々に於てのみであらう。

○  
信仰は靜かに燃ゆる火である。

一  
基督教は厭世主義とは絶対に相容れない。この宗教が現世的なるもの肉なるものを否定するのは、人間の究極の幸福が如何なるものと云ふことを知つてゐる爲である。即ち究極的幸福追求の結果に外ならない。故に基督教は或る人々が想像する如き厭世主義とは正反對の最も健全なる幸福主義である。

我々は、我々自身が尊いものであるとは決して考へてはならない。我々は成程尊い、然しそれには條件がある。即ち人間は神に連つてゐると云ふ條件の下に於てのみ尊いのである。従てこの條件を失へば、我々は他の凡ての生物と同様に脆弱、無價値のものとなつて了ふ。

「人間は神の恩寵がなければ禽獸に等しい。」（パスカル）

宗教を棄てた人の暗黒と不幸とは、「宗教は有つても無くてもよい」と云ふ主張を、完全に否定してゐる。

「水は乾燥してゐる。」これに類した論説は、虚榮心に支配されてゐる人間には、想像以上に魅力がある。そして彼らは淋しさと暗黒とをそつと噛みしめながら、此等の説を支持して、眞理の岩に自分の躰を叩きつけに行く。

我々は、中心のとれた人間でなければならない。換言すれば我々は「自己の立場」を守り續ける人間でなければならない。そして私一個に就て言へば、私の立場は神を信することである。

世に在る秩序、これは神の喜び給ふものである。

神の中に生き、神の中に呼吸する實感——世のあらゆる幸福にまさる幸福。

○  
一點の影もなく、たゞ喜びのみを享樂する状態は、十字架を負はない状態である。また假令そんな状態があり得たとしても、我々は到底それには耐へ得ないであらう。幽かな暗鬱の影——これは果して禍であらうか。

○  
自己を悠々なるものと結び付けること——これによつてのみ我々は、暫時的なる享樂から解脱することが出来るのであらう。

「我に汝らの知らざる食物あり。」

○

或る胎児は出産の際僅か一分間長く母胎内に澁滞し過ぎた爲、死体となつて分娩された。この事實が何よりも顯著に示すことは、人間の脆弱さである。そして神は我々にこの脆弱さを自覺せしめんが爲に、かくの如き事實を示し給ふのであると考へるのは、愚かなことであらうか。人間が悠々なるものに繼るためには、まづ自己の脆弱さを、痛いまでに判然と認識しなければならない。無自覺な者に限つて傲慢である。自己の弱さを知ることが、強くなる唯一の道ではあるまいか。「一本の葦」に過ぎない人間が、自己のみで十分だと考へるのは一種の自己誤認である。

「神を頼むと、自己のみを頼むと、無限の存在に倚りかゝると、自己一人で立つとに由り、宇宙の如く強くもなり、虫の如く弱くもなる。」（アミエル）